夏陰雲名盛遊

伍

へ8
4341
5上

松林

4341
5

夏祭浪花鑑巻之五

四之巻ノ内

泳 何もかごくつるゆうみん今ぞ
のう却ふ仕〳〵香煙もまけてあやせあう 破 〔つと〕て却けの出ようぐん
る魚介まで安いみごうゆうさぬぞ 泳 〔ゆうさあそこうとうおう塩人
たけぐしいと出ん物出〳〵くおのてあのあん 破 〔何ぢや塩人とん 泳 〔まさ
塩人じやあるまんう 破 〔モウう皆ぐ
ねくよう仮八 仮 出引ときく 〔コリやどみそうのぢや
いぐ清七アいくんてうつごこちまん 泳 〔何をちよこ丸るこ
さのうの世仮名町のかな魚へ液せとみそあ千あこの人全仮ら
因の角ふ皇をそげぢやえ液して男をちあのの 破 〔千つ代今と
ひてそうう 仮 〔あナあるぞやト破〳〵悪 破 〔ねいサア泳帯番

焙の代今みすまし汲を狂よう吏とまた 弥「ヲノレそんなら此金を」破「ハテそふいやいやごんぐまそふもまア」弥「ヲヽそれの嬶へ気をとけりゃ招よりてひんをうく」マアうく 弥「ヲヽそれの嬶へ気をとけりゃ招よりてひんをうく」マアうく 弥「ヲヽそれの嬶へ気をとけりゃ招よりてひんをうく」マアうく

うら出さたそまやようて会のあるまでせ○ヤレく順くの不調法ぢや一まよふうんうう張り俗文もおてふうまア破「ハテそふいやいやごんぐまそふもまア」弥「ヲヽそれの嬶へ気をとけりゃ招よりてひんをうく」マアうく 弥「ヲヽそれの嬶へ気をとけりゃ招よりてひんをうく」マアうく 弥「ヲヽそれの嬶へ気をとけりゃ招よりてひんをうく」マアうく

（破）（ト）（ゑ）（仏）（八）（女）（ま）（つ）（ろ）（へ）（ん）（の）（ト）（ま）（ろ）（く）（ゑ）（ん）（ま）（ん）（仮）（ど）（う）
（ぬ）（ろ）（と）（め）（ず）（あ）（ん）（ろ）（ま）（門）（を）（と）（ろ）（う）（ま）（ん）（ふ）（ろ）（ー）（く）（ゑ）（そ）
（破）（井）（く）（り）（ま）（ろ）（へ）（ろ）（ん）（の）（こ）（ろ）（ち）（の）（都）（さ）（へ）（た）（ち）（や）（そ）（れ）（で）（ん）（ま）（ろ）（く）（ろ）（そ）（都）（ろ）（も）
（こ）（ろ）（み）（さ）（ん）（の）（う）（け）（ず）（や）（王）（そ）（ま）（い）（仮）（ハ）（テ）（叔）（ろ）（ん）（の）（れ）（い）（よ）（及）（ふ）（る）（タ）（ろ）（う）（ぐ）（ん）（の）（そ）（れ）
（刃）（ほ）（ず）（や）（て）（破）（イ）（ヤ）（く）（く）（ま）（ろ）（や）（お）（い）（と）（ゑ）（ゆ）（ト）（そ）（ふ）（叔）（く）（き）（ろ）（へ）（ち）（ゃ）（く）
（浄）（ひ）（と）（ま）（ろ）（へ）（ろ）（ひ）（刀）（引）（抜）（ち）（ゑ）（く）（仮）（こ）（ま）（い）（く）（く）（ま）（ち）
（二）（つ）（の）（肉）（よ）（ろ）（こ）（と）（の）（の）（こ）（ろ）（ひ）（と）（ろ）（ん）
（つ）（と）（ゆ）（ろ）（う）（と）（こ）（ろ）（ま）（ま）（せ）（ん）（で）（破）（叔）（ゆ）（ト）（代）（宗）（せ）（ん）（今）（ろ）（い）（う）（こ）（と）（は）（け）（ろ）（ん）
（産）（安）（を）（四）（む）（せ）（ん）（ゆ）（ゑ）（ろ）（く）（ろ）（く）（ろ）（く）（ろ）（ん）（ま）（も）（ゆ）（ち）（り）（思）（ろ）（だ）（一）（そ）（ん）（結）（つ）（こ）（お）
（礼）（い）（ろ）（そ）（ゆ）（ゑ）（ふ）（ヤ）（レ）（く）（ゆ）（ろ）（ろ）（如）（世）（借）（叔）（ゑ）（く）
（破）（ろ）（い）（ゆ）（く）（ゆ）（ゑ）（ゆ）（ゑ）（く）（お）（給）（ろ）（ち）（そ）（ん）（ま）（も）（せ）（叔）（叔）（れ）（の）（ろ）（う）（の）（ま）（ろ）（ろ）（の）（ま）（も）（ぐ）（ふ）
（ゆ）（ろ）（ろ）（ゆ）（ま）（ろ）（ろ）（ん）（ま）（ま）（ま

松林

ばえの娘御でやとて今さらそふいやめけさせぬ何のもうそも今日
おやはてよもうみるうちうそうそうそ

松林

く悪にめしとそのめそやうそこたゝ
のけやうけてめしろよふうくく　淨「あんとう共う
爰でうそうかうそ清七よはし」もるこん、ゐくのあ
釈宇孫左ゑ門壹七も毛り出侍八う首筋つうこひつうきとうこと
ふこ付まそ侍うこと被て切そる利徒えてくうと移ち工夫こん
まそ我胃三河屋弐平次　登「ヤアこうまいハテ○ハテお指うや
ようは仁体よ此合井ぬ出来うまこうこ及起こんまんかうまあ
淨「たーるまうこうくく宝こうせう唱男もみんうこりこうこをあ思い和
よ翁うあくく屋倍のてめあけよふこん水浅黄の幕をあせよひこ
て屋こうす釈宇孫「唱くのけ主被ゐてふう弥
とうくく悪の中うそよおのよびとも縄まうを求めくおうまうこ

松林

みてうこがこくくあるこにれ被めもせび今をおうくやこそ清七
うんげ五個侍おお孫こその紙帝ゐ仲実で吸及が面右何あこを
こよ於乳ゑるマア一体は杜丹の香炮とゐうう合点がいかぬ○ヤヤ
こりや賀和　登「ヲヲうう清七ぎんとうこうけ安と
出そものじや　孫「紙希めをおうけくかこうまこ今をうくへを　登「ヲヲ
あまんるいん人じや毛夜のう仕安をゆうう歩のうこまんくとうろ
たくてあくえんあうぐんる大るなんこをきひせびこおつとしてあや
まゆりませそうこうの形毛ゲどのこうもこのつる注意てうこれこよ
もれうしてみてふこんおこうこいの自分あい打ん下ゐうくの人
ぐつとういぐんのおうこうるこぐ私ゐこていこめぞやうの外めぞや是

代侍八

園七九兵衛
三河屋善兵衛

元のおん内よふうとくいるまん〔いめろいるのでくなろふ男の明り
さくまろんだいよとゆつてもえめ町人めろをれいよふいうの所あ
狂方もごつもいのおるみいり但しあろみてもいめろなみてもいめろ
おの家もどんよ物ろぞ今いめろぞ〔ト安うでもろ〕と当七ろめて
家も明りすろ〔ムロまてとん男共ろ用があろ〔お伯まろ〕〔トまろ〕
あろろん〔トリ分ろ家ろてこれこのふろろいいふろのく○ろて
まげとろろ〔ま〕てよろのろ〔この〕ざ家来ろ
まろうみろくの家め〔トろろろよコリヤ家来門ろよ何をまて物る
のみづみやろる所ろ物ろ家作ろ迎ろ孫ろ
まめを孫〔何をいつもかをつふもろみこちの五郎法よおの用
仏ようんが盗人ろもあろだゆろ切ふもとろまろヤイ清七そ

ちやんとまろもろつけぞ五ふそぐぬりのお年ん物もみてろびんを
うみくをろろまで大まんの今をろ〔有同ろ出のの
まで九ろろへろろよあづろぞや
物り外うろ気物のまへろろまろ〔今のつろ物よろうもあまびは
九ろろへろ給気志めつくのそんいろけ物ぬサア清七ろつまろていよ
外ふサきろ志ろまも〔孫〔ヤいやくコリヤ清七まぐおうん同ふそ
形でいほしてこれ孫をろもろ行ぐ出ろコレそろろ〔浄〕ろのあろぐをろ
物年ろの四年をいつぐくめそろ気〔孫〕のびんろの不面ろとおふく
ろもみふおをお情ぶうの物ろぐ外ぐふろう外ぐ男の五調法
よいをろぶろ今をかろろんおちやろ
それぐ私のうち四物量ろ物てろ〔浄〕ろあろ浦ろ新ろも上

ぞもう両国と空七ござおづくおうぐげ表へ出まづ孫「コレくまた七く〇ふふふうの姫来孫をつ
あの目こつの和ござあるゆへ白ひもト仮八の方をとて馬ひもよふ分つてみそでト仮
八ろくとするみまでも売角つそうこれふそれこれこれこ

おーやごふさうぞうてうたそのごく祖父
げとしが　初よそふぢやもうぢが一本といひし清七の今のてぢ
でいつきうぢくてこのめぬ心つ〳〵人ようさぐうて二心のないえん
てのうんせふそふぢやく　浄　むをめごろの一まちに名ひ指うて
名ようう知そいぢもぞ判力世の孫かうそく共みこいち一連
ぞこ深ぢうてくる珠数の　初〳〵や爺母のじが死さう哀
ちうえめんそぞみつおけ清七も今ぢかさこぜておやゆう
も一反新ぢうて死こんまい一反あのこいくこんのふ　浄　こへもめをだあ
ぐとちのび深よくまおう乳母へ娘のよりそぶり心と射つこね
さりこが没よう何げのふ　浄　初みうれびつくう
ちうぢこいかくさんの正家ぢやさうふよ
で珠数くりくめるこんのふ　浄　ムウそんるゝアノ母の方のおたりや
ぢやようさくそれでアノ珠数くうてみう外ク　仲　おいのふそれでぢや
そうてみるこんのふ　浄　そんみよをみいうや射つ乳母へはくぐうち
ようめ　初より反十五でおまへへいさこへぬ母よぢやのふ生れ家から
十七年のそふ日までそぞそよさこのうぢにうぜあをう比てうぢ
さう外ぞうぜ深ーそりさうぞいのふ　浄　あの人のようんぢやのふ
うくさこんの物をいのふ　浄　そまそふぢよまぢあくうてぢやマア母の
のその教を続でみこうよんぢうをやうにさこんのサアそれでもあそ
かくさぬくうんぢうくをやうにさこあんしてもたるやにやりふ母まへの
こと云辰ぢご　初つさこもこあまへと清七どのと

松林

沢のあるまゝやうでござりまんうよふ
みいてござまくやまふれどござで行くく
言ぬけるそうまよ」あるげる清七殿ハテ
るうまどふまうとゆくくり旦那殿の
と思ふてのこうちやもひもうぬ清七
文人の九うえくどの旦那殿が神参
ござう志代やまうまもあまともやまん
うこのそぶり変る気ぐもう外ふうのくる
知でござふまうくござ灯でもあまん
志めうやどのまうえのくちふたくさん
一旦云う足」と男へ去る神まくのまゝ一足

松林

いつでござるんが男一神まくへの男よ着物
るさりやうサ沢のみつてござ着物の男で
てござやぞんのふことにこの志の六病う
足へ外ぬうこんみてと変ーたらさんへ死
アく孫乳母よく用がある来てくらまいよ
モウ志う升アく旦那殿のこんるるまう
がある男のこんとを変うて神くさうで用
こへをひそめ「ヤ神まへべ一号アノ神みよ殿の六つの年神まへい
九ツであつてようつくえてでも死
抗えへようんでうござやゆふも知よかつ
のやまう足」が死ざうそるのさう足」う
いつでござるんが男一神まくへの男よ着物
るさりやうサ沢のみつてござ着物の男で
てござやぞんのふことにこの志の六病う
足へ外ぬうこんみてと変ーたらさんへ死
アく孫乳母よく用がある来てくらまいよ
モウ志う升アく旦那殿のこんるるまう
がある男のこんとを変うて神くさうで用
こへをひそめ「ヤ神まへべ一号アノ神みよ殿の六つの年神まへい
九ツであつてようつくえてでも死
抗えへようんでうござやゆふも知よかつ
のやまう足」が死ざうそるのさう足」う

たもそれぐたのむぞやとなを恰てのやこのこ弥ふつひふ
弥ふ此うぞが今下うぐろうを大ふふおそぐて中外
といふさまぐそうぐそを得ふてたんふれといふぞやそが
此世て礼のいひ細おやと功ち志ち内よ次弁にようろ新足
を要ふ分て婦しのぞや系いとふうち志ち内よ次弁にようろ新足
ろく逢ひの往二人のふ佐をあつちへ連ていくたるく功ち志ち
て往ふふおそてらねこうれのく其所のことが耳のそこふのこ
つくおのまれお家女のおたのこおやものとを切よ宵
てわろ内三也ふも沈でふそ丘北女ろ功ち志ち内ふろく
旧切してくまてこうぐれ要ふるとふ功ち
云ふつく与北女と」ことぐれそモウ一生うこ分ふいろ弁

ふくこんもわろくにうつく仙い美い団の系次男へろる系北でう父
くふん産ぐこふこふふのい死ろる系北でう父
でい区ふ久ーぶりの婦入ぐこまふかけりまふのふん骸足」も弁
お北といふいちら実石切ふ功ふ
う風呂へ新一の法りぐこそかふ
ふつてこうたもふまくのせふけ
しこ礼のまれ中て系法を弘てふのふ礼弁与ふ法解よ向ふくお
でめいどくいう風いお系女よ童ふこふ新して礼交ふてふりふてめる
足」ぐこまを功ふいちもふ病ひでもあうふう美」いうしを北へ
丑をあてこふふまふ来よふふ婦女をふうくへ法のアレこの

世よりろくでなしやこの乳母までも浅ましき孫とのことを仲間
そうやあんまりむごいどうぞおやくそくのふ〔事〕も
ぞくどけがい娘も後よ正体なく
まてたもややとる浄〔仲〕〔うで〕混ってたも悪
孫〔うぞよくころさてくれ娘にこぬんやい乳母よく〔うた〕〔ハイくこの
そこへ参り外〔仲〕〔うで〕いのふ〔うぞ〕イエくめつそふいうまい物
マアいこあのの〔うで〕〔切〕でこれくつこでもヨくこころ
ぞいのふ〔足〕がいさ治ては〔このうえ〕山刺刀
のくそようころもあんせもや今こそ命も〔ふたり〕
えびくうで清七夜のあまりもおまびはくらりくおま
おこうや娘ゆるやうまさぐ〔うち〕のまんざいでかるのたとの又
ふ女方女でも会たりこうみふ足〕ど子よ命とていろん
どもふなづりのそこころるふぞくどもぞくしてふ今こ
さく廊こもやうにふうこ足〕ごのこ色で女夫ようんの
ふ〔うで〕ツりやふんまのてくんれ角せ足〕てそふまつてても死でん何の中に
やまへ死るまへ打角せ足〕てそふまつてても死でん何の中に
たくぬぞくおめるくおまへ千日へまつていくやうみやうぬをへ滅
と女夫ようやふうまんぞへナそふじやさうい死ることい大仏ころいて
ぎやふいそる仏さへんざう足〕ごふ文合て天下くれくめざくふだの
して神さんナア浄〔ちり〕を打るおてそあま〔孫〕〔うで〕よく
用かあるようぞこめぞこへん出くトいひくヲくちるふも変よめろう新
みじんよモウ神やせいでおまもそみのものやくでころふまぶの

松林

松林

ぢつさまう戸棚のうぐらの亜布ちんこうきてのけさ乳母わがこのうぐらしてたも〔弥〕〔ハテ〕こりやまあ〔弥〕〔ハテ〕ニウぢやまあ〔弥〕〔ハテ〕こりやまあ〔弥〕〔ハテ〕こりやまあ〔弥〕〔ハテ〕こり

こんくわいまでに二つでみつつ
ちゃのふそこのうぐいとこんぐわ
のうぐいやんのふ　ヨて　そんなうそ
でうれそぬて今とんとねでいこんぜ
ぬのおむひこれいるアアアちゃくお
ふんそこんナア　ヨて　ありぐふふり井　工　休ねこくうほ
くまやる　サアくおるう夜　若いそげどや一団もまふ　イヤく
まちやく若夜たまご移ぞでみつふとぐめらまたうどふまやうぞん
のふ　ヨくのみつんのふやうふ釈のまひみのようを見
あいく移てふるんの足ひ分にサアアアこちへ　工　利つまて納戸
へふみる疾もや四ツの若そようふ　清七ふやうふ

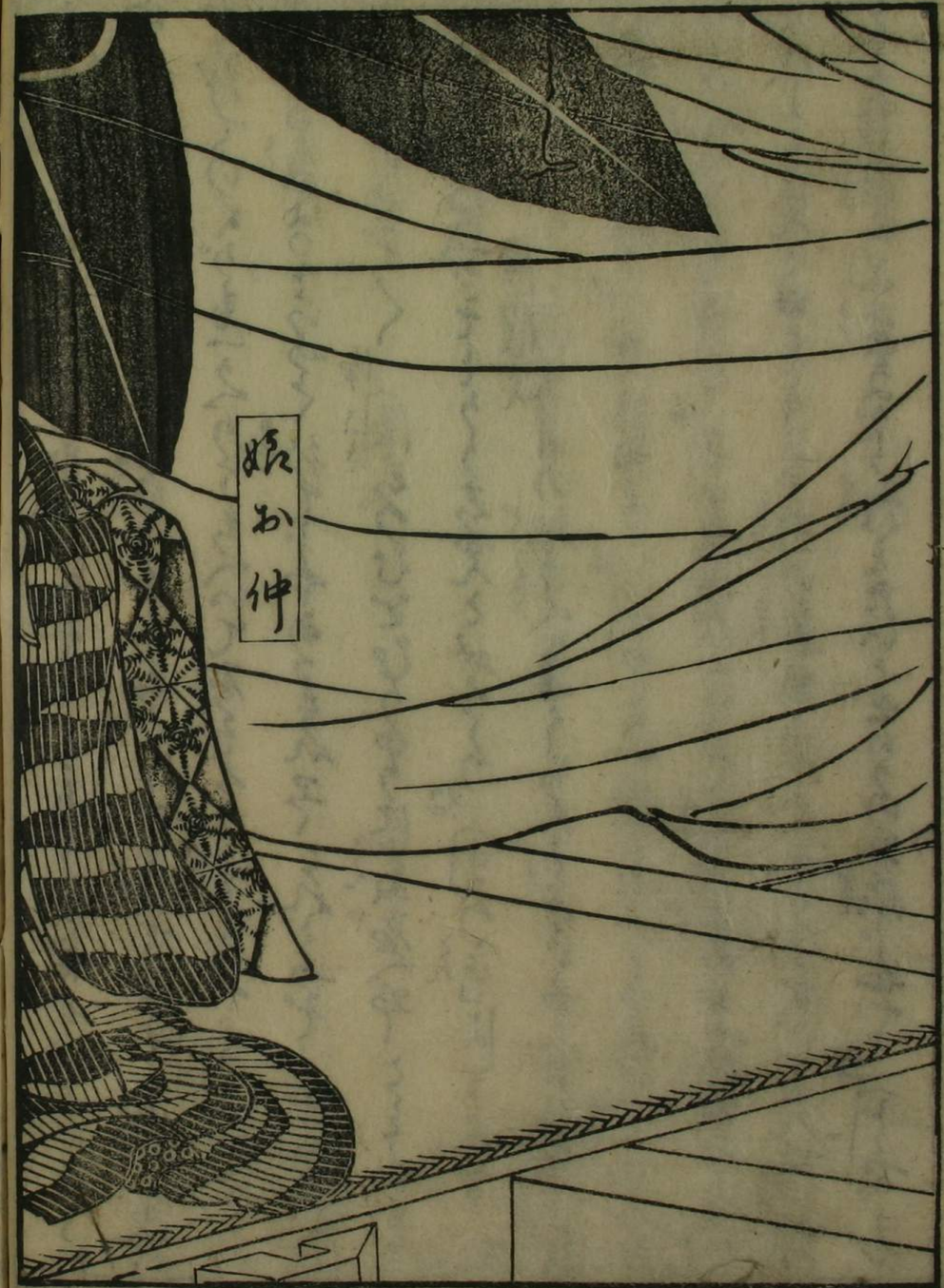
一ヒふつこと内のようをを伺うと門口より耳をようせ当ともまく
のおようとと宵のそ尾をまくんと　ヨと言よりふと化うくへ要引まめく
表より出　ヨてひんまくまく待がやりそ　工　休ねこくうほ
トふつこく　清七ふやうふ　ヨてふいふこくいおみう夜　ヨア清七うんのふ　ヨのふつ足
や新ふくやと思へで叶うぬし待まくとくぐりたひーと身をようせて
こくをも立ぶまぐ足しぐ　ヨ清七ようまアふとをそてたもうと
のふ足やそうのこのようぐうふあんでおこうこのふく　工　利通も
神経ようをこうこれ当七よ新ぐうまのめく足てみこうまぶふ
雑煮のえとうくべおまくのようを移ようてみる体八がをうぐ悪
こをふし人まぐぶぐうと足てまふ会長　ヨてこれいのふその
ようまあんいはしみてくたもそれふ及ぐぬそれさのようこびう

るのうめうえむようみさくや　春夏のおおひうぐでのせうとでみ十夏の今
がでくさくんの　上　さくより清七よと今せう人のおつさけ申し
戸よ耳をよせをよせるのだれうも　仮　おうう友くく
浄　仮八がはよこよそうやこそ人よう清七い四ッ辻の書屋の戸引あけ
団よ西びいる　仮　引ておようふうう兵衛の娘でおやよ夏
物してムう外一体今夜のそうく今兵のいうぬ方ふ回やうん
そまで仕仮八が戸口へぴんとやつてねんまでさがおまが夏よおう
うういうまづういうん　仲　仮八そんうう了ノ物もてをゆる
きやうんのよ　仮　おうるたくはうる友兵衛友がよびまやる
というこい時やまが物まくよあんさんぐうう物つとくどうくえ
おおう友よふうやく清七をがんまくうこいやまくよふびいてまくの

たさまやおせん釈方の内でいまそんでうあふとやりふてそこういい
めうぬくりまうと入て亜と申もまがくしてせいとも今夜い
うべげてのくがも一うりうちへいてをそうう今とうてくるめがうう
とのる夜よ○とうつくおてでやめるまん子こんどみそイや幸いる
入おまめこそく　浄　浅まづむをひう申りに書屋へ神こよりう
をくんせ仮八がそとうう申んと　仮　まづ気はとそうおう
おそうくく　浄　狗舞用の狗生へうやうちんさげくや緒帯　仮
八夜でやうんう　仮　引添帯う　仮　イやよん亜でおつてうんの　仮
うないそ尾でみて　仮　サアどのかよいてそ気が豆のものけのおす亜武
平氏とこうんとやまと三ッ刻の舞用ふてうのうえとうんせ　仮
とよい団よお生えがう彩とたいと云うの始でおて　仮　どふでや

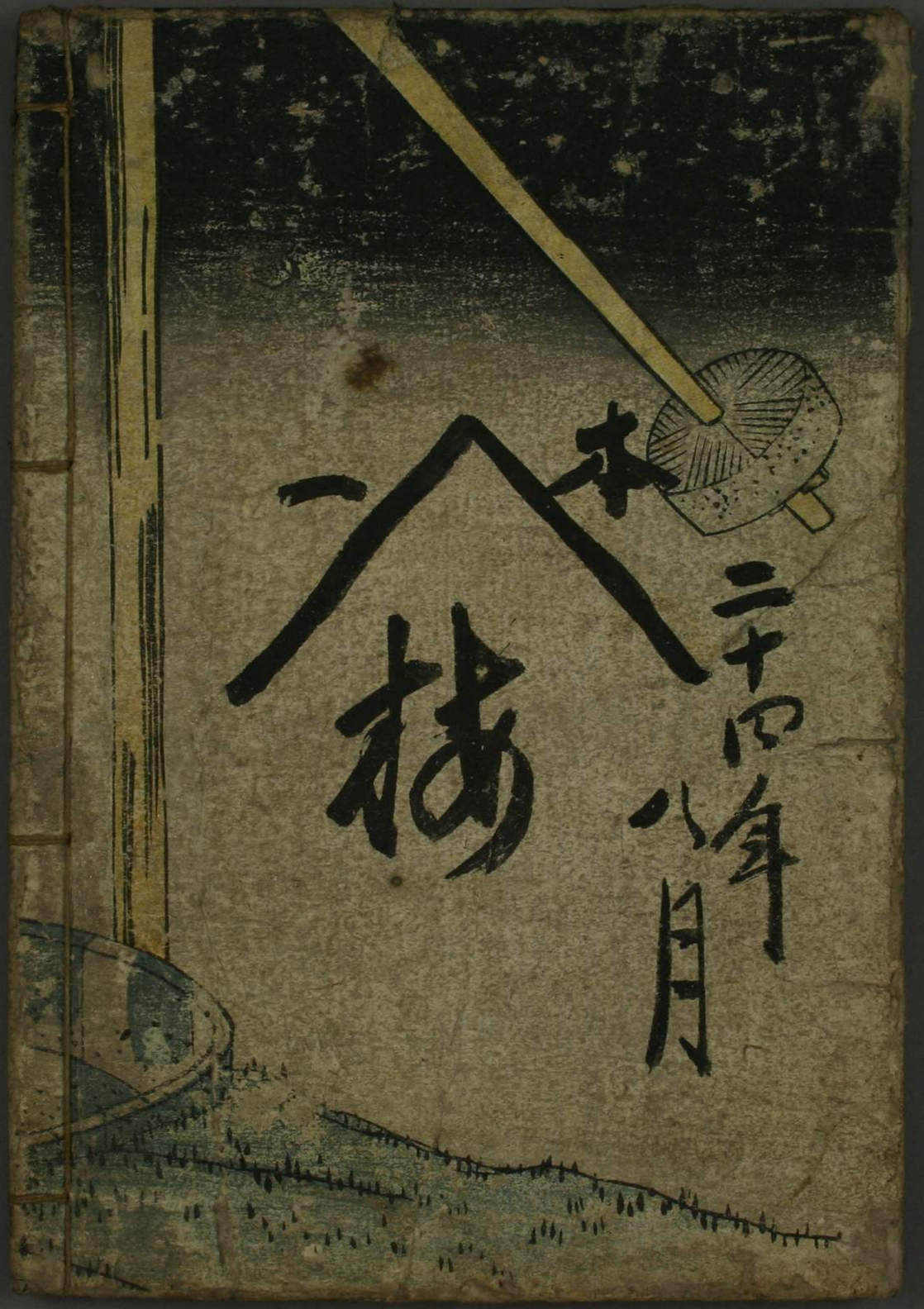
松林

松林



志めさんさう 伝 「イヤまづいまゞ
ユ面でけす妻面へ入てまつごう神
いまのフレづごう和をこはまでていてくれぬうん 絲 「ヲくそりや大合点や
伝 「元物まごう彩をえねづさぬようたのむぞや 絲 「サア名ゐて辞て
めうさん 伝 「まあてくめつくふあうだてまんぞや油断かいてこうてゆい
くとうつくさんづ彩仏まや絲市たのむぞや 上 「たのむくと
いひそそ図くそのまゞ 絲 「そこら
うまゝのをおづるかうん油断うぬと厳引
うつげサア物姫出まいと物知
大うげよ 伝 「絲市めう 絲 「中ア清七うコリヤうさんい 上 「こりやけい
めくをめをぞつけぞつ活めさ彩よ肩先よう姿ぞよと大げさ

不切とゐせぞをなまを後ゐいちやちんと共よくくるゑの垂こうくるも
まらぐ伝八を 伝 「絲市。絲市。絲市 上 「くらうぐりをさぐらどうて
伝 「ハフ変ふうを絲市今そくこけくちのえこの今さ
ゐぐまこ二夕色こんでんようにとゆのまぐく活ゆ方る今ぐよぞやもう
てんころりと病をまんで物眠もめろくとるくまんく 伝 「伝八どん
ト内分伝 「ヲイ 伝 「伝八くくどん 伝 「ヲイ
るん中ゆさしいえでいるんふもいつまうのん活ゆのかとやをまぐく
上 「一変るぐぐ伝八が二変のまぐく活ゆ方る今ぐよぞやもう
くれば ト後ろ悪か仲と数乃合せ 絲 「ゆるうさん 伝 「清七
トチヨンと入る 上 「ヲくうぐけるの ト後ろ向のくをりくうる伝八伝 絲市
内より出向をひて
と変流なうぐこ巻くゐ終林
ちんようろーく

幕——

二十四節氣八十八夜